

Canforo

カンフォロ

愛媛県美術館ニュースNo.32 2007

No. 32

Exhibition **企 画 展 1**

松山藩御用絵師

松本山雪

—桃山と江戸のはざまに—

平成19年2月10日[土]—3月25日[日]

休館日は、本紙ご利用案内でご確認ください。

●会 場/新館1階[企画展示室]

皆さんは松本山雪という名の絵師をご存知でしょうか。先日、筆者が大学生約70名に質問したところ、知っていると答えた学生は0でした。おそらく、街中で聞いてみても知っていると答える方はほとんどいないでしょう。

ですが、松本山雪は、一度作品を美見すると忘れられない、なかなか魅力的な存在です。今回の展覧会は、こんな絵師がいたのだということを示すだけでも多くの方に知っていただきたいとの思いで開催します。

松本山雪(?~1676)は、江戸時代初期に活躍した伊予松山藩の最初の御用絵師です。山雪に関する同時代史料は、松山藩に仕え、禄を受けていたことを示すわずか1行のみですが、作品数は少なくなく、特に当地では馬の絵を得意とした絵師として知られています。他にも楼閣山水図や名所絵なども知られ、当館所蔵の「製茶風俗図屏風」はこれまでも紹介してきました。これらは、硬質な墨線による精密な建築描写や、屈曲した樹木表現、幾何学的構図など、京狩野の影響下にある癖のある作風で、山雪は漢画系の絵師として認識されています。今回、展覧会の開催にあたって作品調査を行う過程で、これまでは知られていなかった作品を少なからず見出すことができました。その中でも「源氏物語図屏風」(個人蔵)は、従来の松本山雪像に新たな一面を付け加えることになる面白い作品です。金地に濃彩で描かれた本格的なやまと絵の出現はこれが初めてで、これまで作品の幅は決して広くはないと考えられていた山雪が、予想以上に幅広いジャンルを手がけていたことが分かってきました。他にも他の同時代の絵師があまり手がけていない珍しい画題の作品の存在が明らかになるなど、本展覧会の準備中に多くの発見がありました。

本展覧会では、17世紀後半に松山にいた松本山雪という絵師の面白さとこの時代の活気ともいうべき様相をお伝えできればと思います。そして、展覧会の開催後、さらなる新知見があることを期待したいと思います。 学芸員 西田 多江



松本山雪「製茶風俗図屏風」(部分)愛媛県美術館蔵
上部：松本山雪「野馬図屏風」(部分)個人蔵

記念講演会

要申込(定員55名)

2月17日(土) 14:00-15:30

講師: 奥平 俊六氏 (大阪大学大学院教授)

●会場: 研修室

講座

松本山雪について

要申込

●(大人編) 2月24日、3月10日(土) 14:00-15:30

●(子ども編) 3月17日(土) 13:30-14:30

実技講座

緑を飾る—緑を感じて春を感じる—

●2月17日(土) 14:00-16:00

●3月 3日(土) 10:30-14:30

学芸員によるフロアレクチャー

毎週日曜日 14:00-15:00

●ボランティアによるギャラリートーク

毎週土日 11:00~ 要企画展観覧券

●ボランティアによる学校団体向けギャラリートーク

事前要申込

青山二郎の眼展

平成19年1月26日[金]ー3月4日[日]

休館日は、本紙ご利用案内でご確認ください。

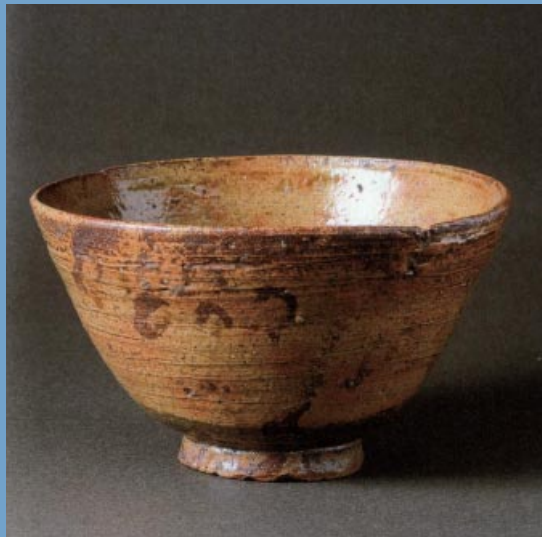
- 会場／新館2階[常設展示室1・2]
- 主催／青山二郎展実行委員会、愛媛県美術館

白洲正子の随筆も、小林秀雄の評論も、この男から始まった「希代の目利き」と言われた青山二郎(1901-79)の展覧会を開催します。

白洲、小林のほか、河上徹太郎、永井龍男、中原中也ら昭和を代表する文化人が集い、大岡昇平が名付けた文学サロン「青山学院」。青山二郎はその中心人物でした。東京・麻布の大地主の家に生まれ、裕福な家庭に育った青山は、幼い頃から古美術に関心を持ち、特に中国、朝鮮、日本のやきものを知り尽くしたその鑑識眼は、常に一目置かれていました。白洲、小林の骨董の師でもあり、また柳宗悦とともに初期の民藝運動を支えたことで有名です。その一方、千利休、富岡鉄斎、梅原龍三郎らについての評論を著し、また装幀した書籍は2000冊にもものぼりますが、「何者でもない人生」(白洲正子)、「やろうと思えば何でもやれた天才なのにわざとなにもしなかった男」(加藤唐九郎)と言われたように、生涯通して定職には就かず、「高等遊民」としての独自の人生を歩きました。

本展覧会は、今や「伝説の人物」として語り継がれている青山二郎の世界に改めて迫ろうとするものです。青山自身、あるいは白洲、小林らゆかりの人々が所蔵した中国、朝鮮、日本の古陶磁器や工芸品を中心に、富岡鉄斎、北大路魯山人といった青山が評価した芸術家たちの作品、そして唯一の「仕事」とした数々の装幀作品など、約200点を紹介し、美の探究者・青山二郎の眼を通して見た昭和の芸術・文化の世界を探ります。

学芸員 長井 健



伊羅保茶碗 李朝(16~17世紀) 個人蔵

INFORMATION

19年度企画展紹介

愛媛発信の展覧会から海外のコレクションと幅広いラインナップとなっています。お楽しみに!!

智内兄助の世界展 - 空の^{たか}すみへ、海の深みへ - (仮称)

平成19年4月28日(土)~6月10日(日)

和紙にアクリル絵具という画期的な絵画表現を創り上げた今治市出身の洋画家・智内兄助。長女をモデルに艶やかな着物姿の童女を描いた一連の作品をはじめ、高校在学中の初期作から、ヨーロッパに活動の舞台を移した近作までを展覧し、その画業の全貌を紹介します。

愛媛の名工ふれあい展Ⅲ

平成19年9月7日(金)~9月24日(月・祝)

愛媛県内において、桜井漆器、西条だんじり彫刻等、木・竹製品の伝統工芸に従事している名工たちの優れた作品を紹介し、愛媛の伝統工芸のよさに触れていただきます。

吉村作治の早大エジプト発掘40年展 (仮称)

平成19年12月1日(土)~平成20年1月20日(日)

吉村作治教授率いる早稲田大学古代エジプト調査隊の活動40年を記念して、膨大な数に及ぶ発掘品をエジプト政府から借り受け日本ではじめて公開します。世界的な発見として話題となったダハシュール北遺跡での未盗掘の完全な形で発掘されたミイラは必見です。

ふしぎな世界 M.C.エッシャー展 (仮称)

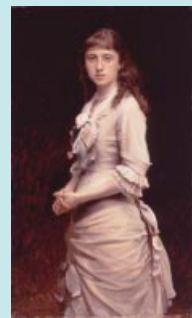
平成19年7月14日(土)~8月26日(日)

見る者を幻想の世界へとといざなうふしぎな「だまし絵」を得意とし、その完成度の高さから視覚の魔術師とも称される版画家M.C.エッシャーの魅力や、ハウステンボス美術館が所蔵する作品により紹介します。

国立ロシア美術館展 ~ロシア絵画の神髄~

平成19年10月3日(水)~11月11日(日)

国立ロシア美術館のコレクションから約80点の絵画・彫刻・工芸を厳選し、18世紀後半から20世紀初頭までのロシア美術を俯瞰する展覧会です。ロシア独特の雄大な自然をテーマにする一方、神話や英雄の理想主義絵画や庶民を描いたリアリズム絵画へと発展したロシア美術をお楽しみください。



イワン・クラムスコイ
《娘ソフィアの肖像》1882年
© 国立ロシア美術館

ブラハ国立美術館所蔵 ルーベンスとブリューゲルの時代 (仮称)

平成20年2月9日(土)~3月30日(日)

ブラハ国立美術館のコレクションから、17世紀のもっとも偉大な画家の1人に数えられるピーテル・パウル・ルーベンスとブリューゲル親子をはじめ、その時代にネーデルラントで活躍した画家達の特徴をもった作品を中心に、後期ルネサンスからバロックの芸術の流れを体系的に紹介します。

大竹敦人

サイト・スペシフィック・ワークス

風景を閉じこめる球体写真

遮光した箱に小さな穴を設け、その穴から取り込む外界の光の反射によって箱の内部に風景を写すピンホールカメラ。当館のアトリエ同好会でも取り上げ、アトリエ周辺では愛好者が増えつつある中、その原理により、フィルムとカメラの機能を持たせたガラス球で球体写真を撮る大竹敦人氏を招き、公開制作とワークショップを11月に開催しました。

公開制作では、3本のクスノキが象徴的な美術館の中庭で球体写真の撮影を行い、現像処理後、再び撮影した場所に展示するまでの工程を公開しました。カメラとも写真とも想像つかない形態に戸惑う見学者に対し、大竹氏はわかりやすく自分の制作について答えてくれました。球体写真に参加者を撮影するイベントも行い、像を焼き付けるために必要な光や時間を体感しました。

さらに、作家の考えや手法にふれる2つのワークショップを実施しました。多面体、円錐、円柱などの立体写真を印画紙で制作するワークショップでは、大竹氏の球体写真の制作過程を追体験しました。また、ピンホールカメラの内部を知るワークショップでは、ダンボールで人が入れる程のトンネルを作り、その壁面に小さな穴をあけ、穴から内壁に投影された鮮明な外の風景を見ることができました。

今回、ピンホールカメラという装置を通して、作家、作品、来館者が交わり、普段見過ごしていたものや気付かなかったものに出会うことができたのではないのでしょうか。

学芸員 石崎 三佳子



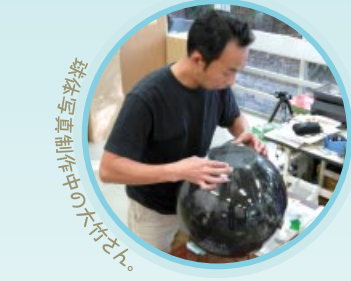
立体写真のカメラを制作中。



球体写真で撮影。十分間の静止です。



中庭に、大竹さんの作品が展示されました。



木漏れ日のトンネル制作中の大竹さん。



木漏れ日のトンネル。なんと全長20m



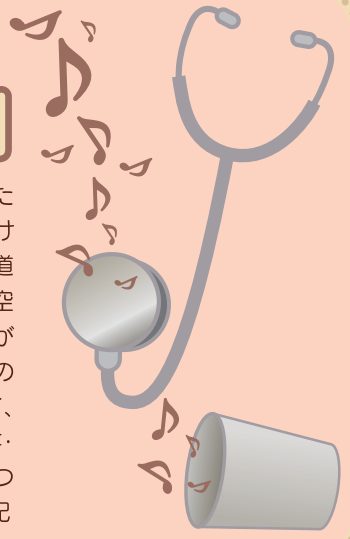
トンネルの中の映像です。

美術体験講座

♪「なんの音? ~美術館で音ひろい~」

「いつも静かな所、というイメージの美術館。でも実は日々いろいろな音に溢れています。いったいどんな音があると思いますか?」こんな感じで講座はスタートしました。参加者は、自分が見つけた“美術館の音”を書き込むためのシート、聴診器(本物!)・長さの異なる筒・紙コップ等の音探し道具を片手に音探検に出かけていきます。そして…「エレベーターのチャイムの音」「自動ドアの音」「空調の音」と主に機械音を中心にした音を発見される方、「中庭で風のそよぐ音」「展示室でお客様がコツコツ歩く音」「図書室でお客様がそっと紙をめくる音」等々、それぞれ異なる視点で“美術館の音”が集められました。また、「何の音?」と題して、ある音(展覧会前の展示作業の音です!)を聞いて、何の音か当てるクイズにも挑戦しました。そして最後に「調査・研究」「展示・公開」「教育・普及」「保存・修復」の美術館の4つの機能を中心に、集められた音を場所別、機能別に分けて、美術館の働きについて話し合いを行いました。

学芸員 鈴木 有紀



版画教室

アトリエ運営の転換期である今年、新しい試みとして、友の会の協力を得てアトリエで短期教室を開催しました。内容は、浮世絵として日本では広く親しまれている「水彩多色木版画」を取り上げました。創作版画の中西俊佳氏(版画家)に講師をお願いし、多色木版画の技術&楽しさをお伝えする講座となりました。

講座は、下絵を作るところから始め、水彩木版画の特徴を生かした色重ねを考えながら4版に分版し、版木に左右逆転させて写していきます。全ての図柄が合致するように見当を版木に付け、彫り進めていきます。礬砂引きをした紙に、刷毛で色を版木に付けたら、紙を見当に合わせ置き、一色一色バレンで刷りました。見当を全員同じ幅にしてしまったために、紙の余白が無くなってしまった人もいましたが、水彩多色木版画らしい色の重なるの妙を楽しめる作品が出来上がりました。

これからもアトリエで、講座を開催していきたいと思っています。どうぞ、お楽しみに!

学芸員 田代 亜矢子



智内兄助の世界展(仮称)

一空の^{たか}崇みへ、海の深みへ

平成19年4月28日[土]ー6月10日[日]

休館日は、本紙ご利用案内でご確認ください。

●会場/新館1階[企画展示室]

智内^{きょうすけ}兄助(1948～)は、和紙にアクリル絵具という革新的な技法で、独自の世界を表現している愛媛県出身の洋画家です。越智郡波方町(現今治市)に生まれた智内は、東京藝術大学在学中の1971年(昭和46)にシェル美術賞展で佳作賞を受賞し、頭角をあらわします。さらに大学院修士課程修了後は、安井賞展、東京セントラル美術館大賞展、日本青年画家展などでの受賞を重ね、現代画壇の実力派の一人として高く評価されています。1987年(昭和62)には、安井賞展の人気投票による特別賞を受賞。さらに1992年(平成4)3月から約1年間、毎日新聞に連載された宮尾登美子の小説「蔵」の挿絵を担当し、大人気を博したことは、記憶に新しいところです。2002年(平成14)にはパリで開催した個展を開催し、当地の金融財閥ロスチャイルド家の知己を得て、多くの作品がコレクションに加えられました。本展示会は、ヨーロッパ進出後、初の大規模な回顧展となります。高校在学中の初期作品から、絶大な人気を得た1980年代の童女シリーズ、そしてヨーロッパで高い評価を受けている近作までを一堂に展覧し、その独自の表現世界の成り立ちと魅力を紹介します。

学芸員 長井 健

著作権等の関係により 図版を削除しております

(光の序 声明(1))

INFORMATION

博物館教育シンポジウム

ともに見る、ともに学ぶ。

平成19年2月4日(日) 10:30～17:00 会場/新館1階[講堂]

美術館や博物館の活動での「対話」の持つ力について、実際の活動報告とともに、「対話」や「学び」について考えるシンポジウムを開催します。

*参加希望の方は、当館普及係までお問い合わせください。



美術館日記

「美術館の裏側・・・」

今回は美術館の図書コーナーで情報サービスボランティアとして働いている、金子英子さん、梶原早苗さん、武智宮子さんにお話を伺いました。

- お仕事の内容を教えてください。「図書コーナーの受け付けに座り、美術関連記事のデータ保管の作業をしながら、美術館の所蔵作品や、他館の展覧会情報、そして観光案内にいたるまで、来館者の様々な質問に答えています。」
- 大変なところは? 「美術館のスタッフの1人として、館全体のことや美術の専門的な質問が多く責任を感じます。」
- 読者に一言。「見晴らしが良く、静かで落ち着ける場所です。ぜひちょっとした空き時間に、美術の本をひもときに足を運んでください。」

インタビュー 学芸員 杉山はるか



ご利用案内 ■ 開館時間:9:40～18:00(入室は17:30まで) ■ 休館日:毎週月曜日(月曜日が祝日及び振替休日にかかる場合、毎月第1月曜日は開館、翌火曜日が休館。)

アトリエ 利用時間 9:40～18:00

創作活動のできるスペース、アトリエはどなたでも自由にご利用いただけます。お申し込みは、お電話か、直接来館して予約してください。

- 利用内容:版画・木工・染織・写真・粘土など
- お問い合わせ先:ふれあいアートセンター tel.089-932-0147

講堂・研修室・県民ギャラリー

講演会、研修、作品発表の会場として講堂(定員120名)、研修室(定員56名)、県民ギャラリー(12室)がご利用いただけます。料金等、詳細については、当美術館総務課まで、お問い合わせください。

ハトの声(編集後記)



昨年末に作品収集評価委員会が開かれ、当館に新たなコレクションが加わることとなりました。3月には常設展示室で新収蔵品を披露する予定ですが、カンフォロでは、次回、作品をご紹介しますと思います。カンフォロを待ちきれない方は、ぜひ新収蔵品展にお越し下さい。(M.I.)

休館日のお知らせ

●=休館日



愛媛県美術館

〒790-0007 愛媛県松山市堀之内
TEL 089-932-0010 FAX 089-932-0511
<http://joho.ehime-iinet.or.jp/art/>